
夏の蝉声

殺狂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の蝉声

【Nコード】

N5279BA

【作者名】

殺狂

【あらすじ】

田舎に住む双子の少女の周りで、だんだんと何かが起こるのです。解決とは言えない解決の仕方です。

第1話

八月の田舎は、静かだった。

人の声はまったくせず、蝉の声だけがあたりに響く。ミーン、ミーン。

家の前にある向日葵畑は、幾つもある太陽の子供のようだった。

「暑いねえ」

「そうだね・・・」

縁側で向日葵畑を見ながら、双子の妹の愛は言う。その横には扇風機が置かれており、ちゃんと動いていた。

私はというとその縁側に面した和室で、アイスを食べながら漫画を読んでいた。

双子である私達は、現在、二人だけで暮らしている。

両親は外国で仕事をしていて、急に慣れない場所に行かせるのは悪いだろうと、母方の祖母の元に預けた。

だが、その祖母もボケてきたため、祖父が強制的に介護施設に入れた。

そして、祖父はそのまま他界。

一応両親に言ったのだが、「いまは仕事で手が離せないから、しばらくそっちで暮らして」という見捨てたような言葉で、電話を切った。

それからは、ずっと二人での暮らし。

「恋・・・お腹すいた・・・」

「あー。うん。じゃあ作ろう。蕎麦でいい？」

「うん・・・」

愛は家事は大体できるが、料理だけは酷いことになってしまう。昔から味覚障害が少しあった愛は、料理を作っても味が薄いと言つて、味を濃くしてしまうことがあった。

両親はそれを分かっているのかいないのか、しょっちゅう愛が作った料理に「味が濃い」と文句を言っていた。

そして、そのたびに愛は私に泣きじゃくってきた。

それからというもの、料理当番は私が行うことになっている。

最近は治療薬を呑んでいるため、味は大体戻っているらしいが、それでも不服なんだとか・・・。

「はい、出来たよ」

「ありがと・・・」

今年の夏は酷く暑くなるようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5279ba/>

夏の蝉声

2012年1月14日17時47分発行